

32. 秋の善光寺参り

医事万華鏡

お彼岸に、善光寺にお参りにいって来ました。1泊2日の旅でしたが、松本から長野まで車を走らせ、父母の供養を済ませた後、善光寺にお立ち寄りしました。

ところで、善光寺と言えば、皆さん「牛に引かれて善光寺参り」という諺をご存知のことと思います。ただ、その由来になっている善光寺に伝わる物語をご存知の方はそう多くはないのでしょうか。

「信濃国の小諸という地域に、欲深い老婆が住んでいました。その老婆が軒下で布を干していると、どこからか牛が一頭やってきて、角に布を引っかけて走り去ってしまいました。老婆は怒りに任せて牛を追いかけていきましたが、牛に追いつけず、遂には善光寺の金堂前まで来てしまいました。日は暮れ、たちまち牛の姿はかき消えてしまいました。ところが、善光寺の仏さまから光明が差し込むと、老婆の足元に牛のよだれが垂れているのが目に留まりました。そのよだれはまるで文字のように浮き出て、「うしとのみ、おもひはなちそ、この道に、なれをみちびく、おのが心を（牛とのみ、思い過ごすな、仏の道に、汝をみちびく、己が心を）」と書いてありました。老婆は直ちに心を入れ替え、その一

※7年に1度の「善光寺前立本尊御開帳」は【令和4年4月3日（日）～6月29日（水）・88日間】

晩を善光寺の如来さまの前で念仏を唱えながら明かしました。家に帰ると一層信心深く過ごしました。そんな中、近くの観音堂をお参りしたところ、観音さまの足元に牛に奪われたあの布

が置いてあるのを見つけました。牛に見えたものは観音菩薩さまの化身であったと気づいた老婆は、さらに善光寺の仏さまに帰依し、極楽往生を遂げることができました。」

このように「牛に引かれて善光寺参り」は牛に布を引かれて善光寺に行つたことがきっかけで信心深くなり極楽往生を遂げたというお話ですが、現代では「思わぬ他人の誘いで物事が良い方向かうこと」を表す言葉として使われています。

そんな善光寺と言えば、本堂に入つてすぐ左手の台座に座られている「おびんずるさん」に目が留まります。お釈迦さまのお弟子の十六羅漢（高僧）の中で、病を治す神通力が非常に強い方だったそうで、善光寺のおびんずるさん像にも病を治す霊験があると信じられ、「なで仏」として病人や怪我人が自らの患部と同じところを撫でると治るといふ信仰が広がりました。そのおびんずるさんの霊験を求めて、約3000年経つた今もお参拝客が訪れてやまないそうです。

善光寺は、日本に仏教の諸宗派が生まれる以前に創建された寺院であることから、宗派を問わず誰でもお参りできる無宗派の寺とされています。コロナ禍で外出もままならない時期ではありますが、状況が改善した際には、秋の信州を訪れてみてはいかがでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

